タイトル考えてないの投稿時に気付きました

ホイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル考えてないの投稿時に気付きました

【Ｎコード】
Ｎ４３３３Ｚ

【作者名】
ホイ

【あらすじ】
転生オリ主君＋オリ設定ありでの話です。
勤務時間の空き時間等で書いていますので、一話一話が短く不定期になると思います。
被りの無いように考えていますが、有りましたらごめんなさい。

一個目！

「ねぇ、異世界に転生ってしてみたくない？」

知らない女に声をかけられた。

「えっと…宗教なら間に合ってますが？」

「違う違う！新しく楽しい素敵世界に行ってみたくない？」

あぁ！なるほど！

「病院から勝手に抜け出したらダメじゃないですかー」

「そっちの人じゃないわよ！失礼な人ね！」

「おばあちゃんご飯はさっき食べたでしょう？」

あっ、プルプルしだした。

これはヤバイ！と本能が轟き叫ぶ。

だが、しかし！ここで俺は追撃をーーー「冗談ですごめんなさい」ーーー行うはずもなく頭を下げた。

女性はため息を一つ吐くと話を続けた。

「とりあえず一回死んで、転生なさい」

その一言と共に俺の意識はブラックアウトしていく。

くっ…！このまま目を閉じてしまえば本当に終わってしまうのか…！

「俺には…俺にはまだやるべき事が…！！」

「へぇ…これに耐えるなんてやるわね。で？やりたいことって？」

え？

えーっと、なんだろう？

勢いで言っちゃったから特になんもないよ？

んーっとー…あっ、気持ちよくなってきた！

って、違う違う。理由。そう理由だ！

これでいいや。

「これ読み終わってな…（スパァァンッ！）」

頭が…痛い…です。

だんだんと目蓋が落ちていき、俺の意識は閉ざされた。

…筈なんだけど？
不思議体験アンビリーバボーだと思ってたけど違うのか？
目を開けたら、街中から暗闇ってのは充分アンビリーバボーだよね。

「さて、とりあえず来てもらった訳だけど、何か聞きたいことある？」

さっきの人だー。

手にはハリセンを装備済みな訳ですね。

「ごめんなさいお金これしか持ち合わせが無く…（スパァァンッ！）」

「とりあえず、君に転生してもらうからわかった？」

「わかりましたー」

「聞き分けがいいわね。「わかりましたー」…願い事叶えて「わかりましたー」…あげるわ。何がいいかしら？「わかりましたー」あっ、もちろん元居た場所には「わかりましたー」…帰せないわよ？」

スパパパァァンッ！！

「それじゃあ、私が口やかましいみたいじゃない！？」

「ごめんなさい」

「で？何がいいかしら？」

この本の続きを…！

なんて言っちゃったら叩かれるのは目に見えてるので言いません。

あれ痛いんですよ？

んー、とりあえずはこれかなぁ？

「両親に俺に変わる幸せな何かをあげてください。」

「え？えーっとそれ位はいいわよ？」

あれ？驚いてる？

転生するって事は死んだって事でしょ？

「つっ、次は？」

えー別にいいよ。なんて思っても口に出せるはずもなく、何か無いかと探してみる。

「この姿のままはダメですか？」

「それは出来ないわ。両親がフランス人なのに、見た目日本人なんて可笑しいでしょう？」

「ですよねー。なら記憶消してください。そうすれば未練なんて無くなるでしょう。」

「本当にそれでいいの？後悔は無いわね？で、次は？」

勘弁してください。もう良りませんから！
願い事の押し売りされるなんて初めてです。
さっきの雑誌をパラパラーと開いていきますかねー。
ぶっちゃけあんまり漫画とか読みませんので何でもいいや。

「これください」

指差した先にスーツを着たダンディなおっさんが描かれているんです。
漫画だから変な特殊能力とか持ってるでしょ。

「そっちの趣味！？」

「おっさんはいりません。この人と同じ力ください。」

「何でネギまのタカミチ！？普通そこは『王の財宝』とか『無限の剣製』とか主人公級の力じゃないの！？」

これネギまって言うんだね。初めて知った。
それと王の財宝とか無限の剣製て何？
なにそれこわい

「目指せダンディなおっさん？みたいな？」

「…はぁ、もういいわ。もう行ってきなさい。説明してもどんな世界か分からないでしょ？」

呆れられましたねー。平和なら何でもいいや。

「はーい。」

「それじゃあ、いってらっしゃい」

「その前にお腹空きました」

「知るかぁ！さっさと行けぇ！！」

おっと、まさかの落とし穴。
こう言う時はやはりこれしかないかな？

「Ｉ' ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ！」

「帰ってくんな！」

・　・　・　・　・

はぁ、やっと行ったか。
何あいつ？めっちゃめんどくさいんだけど？
って！あいつの記憶消したらここの事も忘れるじゃない！？
しまったなー…。
なんかこのままだとムカつくから、これをこうして…こうしてやる！
よし！頑張った私！
…次何しようかなぁ？暇だなぁ…。

二個目！（前書き）

更新が早い場合は、「あぁ、会社暇なんだな…」程度に考えてください。

二個目！

この世に命を宿し社会の歯車の一部となりて、時既に四年目。
と言いつつも、もうすぐ五年目になりそうです。
あの時のハリセンのあなたへ。
本当に記憶は消して欲しかったです…！

思い返す事、産まれたとき。
新たな生を授けた実感などなく、ただ目が見えず、体思うように動かず、声をあげれば泣き声。
泣けば口を塞がれ得たいの知れない謎の液体を体内へと流し込まれるか、公然の面々での羞恥プレイ…『だっふんだ祭』。そして謎のジョリジョリ。
あの出来事はやはり宗教だったのだと。願い事はうまく勧誘するための口から出任せ。我ながらうまく騙されたもんだと思う。
そして今は黒ミサ等の儀式の途中なのだろう。
俺の運命はいかに！？
タコに！？いくらに！？

等と思っていた時期もありました。

いや、まぁ普通に考えたら解ることなんですけどね。
産まれ、筋肉が未発達なので活動ができず、泣けばトイレかお腹すいたのどちらかですからね。
もちろんジョリジョリは父親です。

それがわかればもう大変ですよ。

考えてもください。今は生まれたての赤ん坊だとしても、元々はいい年した男だったわけなんですよ？
口にもしたくない事が繰り広げられてるわけですよ。
まさに黒歴史ですね。
やり直しを要求する！

まぁ、それとは別にあまりにも手の掛からない子供だったでしょうね。
子供らしい駄々はあまり捏ねませんし、好き嫌いも無く食べるしで、子供らしさは欠けていたんではないかと思います。

ただ、イタズラをする時は力一杯イタズラしましたよ？
隣の家の一夏君を巻き込んでですけどね。

そんなこんなで、明日には誕生日なんですけど、ここでまさかのサプライズ。
なんとあのハリセンの人から手紙があったんですよ！ポケットの中に。
なぜ今ごろになって…とか何でポケットやねん…とか色々思いますが、そんなものは１ｋｍ程向こうに投げ飛ばして、手紙を開いてみます。

『＊・＋＜・－＜＊＋－＜・，・＝，”）－』

うん。わからない。

『＊＜ー・，＜”ー・）”＋＝”＝）＊＊・，）＝＾＋…ざまぁみろ。』

くっ…くそぅ！
あんな恥ずかしい思いをしたのはあの人の策略だったか！？

『そうよー』

くぅっ！やってくれる！あんなにおちょくったのがき気に入らなかったのですか！？

『気に入るかぁ！』

で、何ですか？

『会話出来てるのはスルーなのね？』

モチのロンで。

『…くそっ！本題を伝えるわ。君の五歳の誕生日が来たら記憶が消えるわ。』

そうですか。

『記憶が消えた後、君の年齢に応じて、君にあげた力を使える様にしておくわ。』

そんなものがあったの忘れてました。

一応教えてもらっても？

『ポケットに手を入れて居合いの要領で握りこぶしを出して拳圧を飛ばす居合い拳。』

…はい？

『魔力は有るけど全く使えない体質で魔法は使えないわ。その代わり気を巧く扱えるわ。』

…阿呆？

『魔法。んで、魔力と気の二つを合成して使える究極技法である咸化法。』

なにそれこわい。

『どれも体を鍛えてないと効果が薄いから頑張って体を鍛えなさい？』

はーい。

『それじゃあ、死んだらまた会いましょ？またね。』

またねー。

との事です。

さてさて、これで俺の人生も終わりなんだと思うと、後悔もやり残した事もあったんじゃないかと思います。
後、半日もすれば本当に死んだことになりますからね。
最後の最後を楽しみつつ生きたいですね。

・・・・・・

と言う訳で、もう夜の九時です。

ぶっちゃけ眠いです。
なんと言ったって、外側は5歳児ですからね。
こんな子供をこれ以上起こしとく訳にもいきませんね。
明日からは俺の体ではないのですから。
未来ある子供のために！
なーんて、うん。眠くてテンションがヤバイですね。
新しいこの子の未来にＮＩＣＨＩＲＩＮよ！
…おやすみなさい。

・・

・・・

この日の夜一人の子供が高熱と激痛を訴え病院に搬送された。
病名は不明とされ、高熱に苦しみ痛みに悶えまた暴れる。
病院に搬送されたその日の日付が変わるまで、悲鳴と叫び声があげ続けられていた。
日付が変われば今までの症状が嘘の様に引き、半月ほど子供は目覚めること無く、まるで死んだかの様に眠り続けていた。

三個目！（前書き）

いや、本当にタイトルはどうしましょう？

三個目！

今日七歳になりました。
この二年間の事を振り替えってみましょうか。

五歳の誕生日の日に高熱を出したらしいのですが、それ以前の記憶が全くございません。
馬的に言うと記憶にございません。

ただ僕が覚えているのは、自分の名前だけで両親の名前すら知りませんでした。
親不孝者ですね。
ずっと友達だった隣の家の一夏君の事も忘れてましたし、千冬お姉さんの事も忘れてました。
無いなら作れば良いじゃない精神で、後は野となれ山となれ。

軽快なフットワークと、素敵なアクティビティ溢れる一夏君と、僕にとっての初恋の人！だけど彼女は一夏にゾッコン！篠ノ之さん家の箒ちゃんと、三人でよく遊んでました。
後、千冬お姉さんの友達で、箒ちゃんのお姉さんの束ちゃん（こう呼んで欲しいらしいです）にも可愛がってもらってます。
いやー束ちゃんと仲良くなるまで長かったよー。
箒ちゃんの可愛さを語り合うことであそこまで発展するとは…。
あえて言うならば、あの右が決まっていたら僕はここに立っていなかったでしょうね。

それ以外に覚えている事は、居合い拳とか言うなんか不思議な必殺技が使えるって事と、体を鍛えろってくらいでした。

この体を鍛えろってのがまた曲者なんですよね。
僕は、普通の人より少しだけ筋肉の付きが悪いみたいでして、普段から難航しています。
ですので、箒ちゃんの家は剣道場も経営なされているのですが、そこに僕と一夏君は通ってます。
一夏君は才能あるらしいのですが、僕には、剣の才能は全く無いらしいのです。
ですので、行ってもいつも基礎体力の底上げと言いますか、千冬お姉さんと共にランニングや柔軟体操を行っています。
また、普段は何かごそごそしている束ちゃんが居る時は、筋トレのメニューとかも考えてくれています。
束ちゃんて普段はあれなんですけど、実は本当の天才なんですよね。
この間は、何か凄い学会か何かに、論文と発明品を発表したらしいけど、まともに受け取ってもらえなかった！って、怒ってましたね。
僕の誕生日には凄いことするから、テレビ見ててね！って言ってましたね。
まぁ、そんなこんなで未来の細マッチョ計画は難航しつつも皆様の助言のもと日々頑張っております。

…はてはて、ここまで考えてると、僕は一体何者なんでしょうかねぇ？
まぁ、普通の七歳児ではないのでしょうね。
漫画的展開で、知らないおっさんとぶつかった拍子に、意識が入れ替わったとか？
それとも過去の高熱事件の時に前世のわ・た・し♪と混ざりあったのか？

…まぁ、そこら辺はどうにかなるでしょう！きっと多分おそらく。

そんなことより、今は一夏君と一緒に、束ちゃんに言われた通りにおとなしくテレビを見ています。

・・・・・

『ニュース速報です！先程、日本を射程圏内に位置する約二千五百のミサイルが日本に向けて発射されました！』

へー…。そうなんだー。

『もう日本は終わりです！』

「ねぇ一夏ー、このミカンおいしーね。」

「何でそんなに落ち着いてんだよ！？」

「え？だって慌てたって何も出来ないじゃん？だから押し入れから出ておいで？」

さっきまで隣にいたはずなんだけどなぁ。
まぁ、千冬お姉さんの弟だしね。
何があっても不思議じゃない。

「本当に大丈夫なのか？」

「さぁ？」

「おねぇぇぇちゃぁぁぁんッ！！」

ふぅっ、不安を煽ろうと思ったのにこのシスコンめ…。

『続報です！今日本から飛び出した白い何かがミサイルを破壊しております！頑張れ白い何か！ひゃっほぅ！！』

テレビの中継を見てみると、白いロボットぽいのが、高速で移動し、ミサイルを切り裂いていく。
切り裂かれるミサイルが爆発して、近くのミサイルを巻き込み誘爆を起こす。
それを何度も繰り返し、ミサイルを破壊していく。

て、言うかあれ千冬お姉さんじゃね？
切りに行く時に、握り直す癖とか、全体的な雰囲気とか？

僕は、隣でアナウンサーと同じように、ひゃっほぅしている一夏に声をかけた。

「一夏。明日箒に会ったら、無事でよかったー！って抱きついてきな。」

「何で箒に？」

「幼馴染みを心配するのに理由なんて要らないだろ？」

「そっか。」

頑張れ、箒。僕的サプライズ。
…うん。頑張れ。

再度テレビに集中する。
もうすぐ終わりかな。
何て言うか凄いね。これ。
もし、あれが千冬お姉さんだとしたら、あれを作ったのは束ちゃん？

「ブゥゥラァボォゥゥウ！！」

もしかして誕生日にテレビ見とけってこれの事？
…もしかしてハッキングして、ミサイル撃ったのも束ちゃん？
いやいやー！さすがにそれはないでしょう！うん！無い無い！

「いぃぃっっやぁっほぉぅっっっ！！」

ホントに無いよね？

まぁ今は、そんな事よりも…

。

「一夏うるさい。」

一夏のひゃっほぅをどうにかしないとね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4333z/

タイトル考えてないの投稿時に気付きました

2011年12月17日18時48分発行